

氏名	吉田 駿太朗
ヨミガナ	ヨシダ シュンタロウ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第345号
学位授与年月日	令和2年9月30日
学位論文等題目	〈論文〉 欧米の振付実践の変遷からみるポスト・コレオグラフィー —「誤動」とジェローム・ベルを中心に—

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	毛利 嘉孝
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	熊倉 純子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	丸井 淳史
(副査)	東京藝術大学	非常勤講師	(音楽研究科)	長島 確
(副査)	フェスティバル/トーキョー実行委員会	副実行委員長		市村 作知雄

(論文内容の要旨)

本研究論文は、欧米における参加型の振付実践に着目し、「ポスト・コレオグラフィー (*post-choreography*)」と「誤動 (*clumsy-seeming movement*)」の結び付きを提示する。事例としては、約二年に渡って参与観察を行ったフランス人振付家ジェローム・ベルの振付実践を扱い、《ダンスと声のワークショップ (*Atelier danse et voix*)》(2014)、続いてブリュッセル、ヴェネチア、ミュンヘンのリサーチを目的とするワークショップ、そして最後にリサーチの成果である《ガラ (*Gala*)》(2015)のフランス国内ツアー及び海外ツアーを取り上げる。これらの振付実践を研究対象の中心に据え、2010年代のポスト・コレオグラフィーを捉えてみようという試みが本稿の主題であり、最終的に振付家のイニシアティブを解体させるような参加者の誤動を浮き彫りにする。

序論では、ポスト・コレオグラフィーにおける、振付家と振付に参加する人々の関係性、集団創作、振付家の不在、の三つの柱を提示する。これらの問題は振付家の意図を逸脱するような参加者の誤動に結び付くことで、日常の偶発性／不確定性と呼ばれるような他律性への視点に立脚し、コンテンポラリーダンスの築く振付家の独裁制を反駁するものである。前述の視点を完全なものとするため、欧米のダンス史における創作プロセスの全体像は「振付家による関係性のアプローチ」と名付けられ、このアプローチには、欧米流の合理化の上で構築される振付方法や振付方法からの逸脱が内包されていると仮説を立てる。

第一章では、ポスト・コレオグラフィーを解明するにあたって予備的考察を行う。まず、欧米の舞踊史の変遷に基づく「身体のシグナル」を実現する振付及び振付方法からの逸脱の観点から方法論化する「身体のノイズ」への振付を網羅する。次に、諸理論の考察を踏まえながら、創作プロセスの分類を検討し、個人創作と集団創作の視座を加えることで、「振付家による関係性のアプローチ」は措定される。最後に、振付家による関係性のアプローチのマトリクスを構築し、ポスト・コレオグラフィーの範囲を措定する。

第二章では、パリ郊外の地域住民を主体とする《ダンスと声のワークショップ》の事例やプロフェッショナル（以下、プロ）ダンサーが追加されるワークショップ（ブリュッセル、ヴェネチア、ミュンヘン）の事例を扱う。ワークショップでは、参加者の偶発性はどのようなものであるのか、を振付家と参加者の関係性の観点から論じ、振付家とアマチュア／プロの関係性によって解明されることを示す。第一に、フランスの文化政策を背景に、ベルはプロの「踊れない身体」からアマチュア「踊れない身体」の振付に移行していることを主張する。第二に、一連のベルのワークショップの参与観察を通じて、ベルとアマチュア／プロの関係性の変化を提示する。第三に、ベルの意図するアマチュア／プロの偶発性を示す。最後に、参加者の偶発性がベルにおけるプロの否定によって解明されると論じる。

第三章では、ダンスの経験の有無、障害の有無、年齢、性別、人種に関わらず参加者が集められる《ガ

ラ》を扱う。《ガラ》では、ベルの意図しない偶発性がどのようなものであるのか、を集団の表象と実践の観点から論じる。第一に、《ガラ》に至るワークショップに着目し、参加者の主体性を確認する。第二に、パリや日本、タイの《ガラ》の参与観察を通じて、参加者の主体性から派生する偶発的な行為と《ガラ》の構成要素を検討する。第三に、パリの《ガラ》と振付家が不在の日本の《ガラ》を比較することで、集団の実践と表象の拮抗性の有無を明示する。第四に、日本とタイの《ガラ》における問題点をパリの《ガラ》と比較し、振付の構成要素としての集団と振付家の相互依存性を論じる。最後に、パリの《ガラ》と日本とタイの《ガラ》の比較することで、集団の表象に不可視な領域の観点から、ベルの意図しない誤動を位置づける。

第四章では、《ガラ》の初演と再演の観点から、参加者のパフォーマンスを再検討し、振付家の体系化することができない「誤動」、そして「身体のノイズ」を明らかにする。第一に、初演における振付家の存在と再演における振付家不在の問題を例に挙げ、集団創作／個人創作の観点から、誤動の新たな捉え方を提示する。第二に、誤動における身体像に基づき、欧米のダンス史から排除される「身体のノイズ」を論じる。最後に、ポスト・コレオグラフィーとしての誤動を問題提起する。

結論では、本研究論文で新たに提示するポスト・コレオグラフィーが振付家と振付に参加する人々の関係性、集団創作、振付家が制御しないという振付家の不在の諸要素の絡み合いによって全体像を形成することを明らかにする。ポスト・コレオグラフィーでは、振付に参加する人々が誤動の概念を共有することで、集団創作を可能にし、振付家が制御しないような、個別的な身体のノイズを見出すことを含意する。それゆえ、ポスト・コレオグラフィーは、欧米のダンス史の合理的な身体の動きへのアンチ・テーゼやカウンターではなく、集団創作によって失敗や真似を連鎖させ、参加者の主体性の中で派生する振付家から見た偶発的な行為と参加者が自ら派生させる無意識的な身体運動の織りなす、偶発的な身体運動を参加者に経験させる。身体のノイズは他者の制御・管理できない有機的な人間の身体への豊穡な視線をもたらし、誤動は欧米のダンス史が連続と築き上げた「身体のシグナル」を実現する振付と「身体のノイズ」への振付を相対化させ、コンテンポラリーダンスのシステムに障害を与えるという点で、既存の芸術システムの「外部」の人々がつくりだすダンスとして帰結する。最後に、振付家による関係性のアプローチにおいて、ベルの振付方法を再度位置づけ、「ポスト・コレオグラフィー」と「誤動」への取り組みを示す。

(総合審査結果の要旨)

申請者の論文『欧米の振付実践の変遷からみるポスト・コレオグラフィー-「誤動」とジェローム・ベルを中心に-』は、現代フランスを代表する振付家ジェローム・ベルの実践を、申請者が「ポスト・コレオグラフィー」と名付ける新しい参加型の振付実践として位置付け、その可能性と限界を明らかにしようというものである。とりわけ、申請者自身がパフォーマンスの実践者として、実際にジェローム・ベルの作品制作に参加しつつフィールドワークを行ういわゆる「参与観察」という手法を全面的に採用しているところに方法論としての特徴がある。論文は大きく二つのパート、(1)「ポスト・コレオグラフィー」を論じるにあたって前提となる演劇やバレエ、モダンダンスにおけるコレオグラフィーの発展の批判的な検証と(2)ベルの作品、特に《ダンスと声のワークショップ》と《ガラ》の二作品に焦点をあてた分析からなる。中でも《ガラ》については、パリと日本、タイの三つの公演における差異と変化が詳細に分析されている。

本論文の最大の成果は、参与観察に基づく記述、そこで培われた人間関係を中心にした聞き取り調査によって、現在のコレオグラフィーの作品が形成されていく過程が詳細に描かれていることである。このことによって、本論文は、単なるベルの作品研究ではなく、21世紀初頭に行われた舞台芸術、身体芸術の実践の現状を記録した一級の資料として評価することができる。

またこうした資料性の高さに加えて、後期近代、あるいはポストモダン的な芸術の発展の中で生まれつつある脱権威主義的／脱中心的／分散的な振付実践、具体的には参加者の自主性や上演されるローカ

ルな文脈からの相互作用をコレオグラフィーに組み込もうとする「ポスト・コレオグラフィー」の実践を新たに歴史の中に文脈化し、理論化することに成功しており、今後のパフォーマンス研究やコレオグラフィー研究の重要な参照点となる研究としても位置づけることができるだろう。

基本的な文化理論の概念や位置づけ、コレオグラフィーの歴史の理解にやや不明な点があること、また本論文の重要なコンセプトである「身体ノイズ」という概念の構築にいくぶん不十分な部分も見られ、学位論文でもこうした点についての質疑応答が行われたが十分に満足いく回答が得られた。

以上をもって、本論文を博士号授与にふさわしい優れた論文と評価する